

【報告】

地域住民の参画によって育つ青年
—自然学校「ふる里あったかとお」の取り組み—

久保田 達夫 菊池 美智世
(国立オリンピック記念青少年総合センター)
(自然学校「ふる里あったかとお」)

To grow up by social participation activities in local community.
—The actual circumstances of Nature “Furusato Attakato”—

KUBOTA Tatsuo KIKUCHI Michiyo
(National Olympics Memorial Youth Center)
(Nature School “Furusato Attakato”)

【要旨】

子どもたちの健全育成を進めるため、身近な地域社会における支援活動は不可避の状況にある。自然体験活動等を実施していくためにその地域を知る住民の参画は大きなウェイトを占め、また、その活動に携わろうとする若者も多くなってきた。ここでは、地域住民の手作りで運営される「自然学校」の取り組みとそこで活動する青年の姿を検証するとともに、地域に立地する青少年教育施設の連携にふれることにする。

【キーワード】

地域社会，青年，自然体験活動，自然学校，青少年教育施設，ボランティア

はじめに

「高遠城址公園の桜」で知れわたる長野県上伊那郡高遠町は、南アルプスと中央アルプスの谷間にある人口7,000人余りの自然豊かな山裾の町である。

この町に地域住民が主体となって手づくりで運営される自然学校「ふる里あったかとお」(2000年3月設立)がある。

スタッフとして自主的に登録している人数は150人以上あり、立場も高校生、大学生、教員、会社員、公務員、農業、林業、商店、建築、主婦等と多岐にわたっている。「生涯学習と地域づくり」を大きなテーマに掲げ、プログラムの

企画から実施まで住民の自主参画により運営されている。

設立のきっかけは「環境にやさしいまちづくり」を目指す高遠町と、同町に立地している「国立信州高遠少年自然の家」が少年のための環境学習プログラムを開発するためのプロジェクトに共同で取り組んだことである。スタッフメンバー中の町民の多くは少年自然の家でボランティアとして活動している人たちである。

当初10数名でスタートしたこの自然学校が口コミで広がり、学生を始めとする若者の参加者が増加している状況にある点に注目し、参画してその経験を通し成長しようとしている青年層の活動に注目しながら、自然学校「ふる里あつ

たかとお」が実施している事業の取り組み方について報告する。

I 町の行政や青少年教育施設との連携

自然学校「ふる里あったかとお」の設立，運営に関して高遠町は町所有の建物内の一角を自然学校事務所として貸与している。また高遠町教育委員会や産業課，そして高遠町振興公社の協力により，交流都市東京都新宿区との交流事業についての共同運営，町内の各地区，各種団体にスタッフと共に事業実施の協力依頼を行う等，自然学校の成長のために全面的な支援を行っている。

この背景には，

- ① 過疎化が進む同町の「地域づくり」の対応策の一つとして，「山村留学」の検討をしていたという事情がある。
- ② 住民意識として，常日頃から住民が地域の子ども健全育成に熱心だという素地がある。
- ③ 町全体の状況としては婦人会の団結が強く，常にボランティア活動に意欲を示しており，自然学校の大きな支援組織になっている。

ということが挙げられる。

国立少年自然の家第13番目の施設として，1990年6月に設置された国立信州高遠少年自然の家は，従来から高遠町との密接な連携を図りながら運営され，開所当時から，地域住民のボランティア活動により支えられてきた。現在のボランティアの登録状況をみると228名の登録のうち，地元上伊那郡近隣は113名となっている。また，長野県を始め，関東地区の若者が多く10・20代は121名（うち学生は85名）が活動補助員として活躍しているが，自然学校への協力を契機にボランティアグループの中での仲間作りが進み，年配のボランティア（バードウォッチング，星座観察，木工，そばうち，植

物観察，歴史の指導にあたって）の支援を受けながら学生を中心とした青年のネットワークが構築されつつある。

この動きは，

- ① 青年たちが青少年教育施設での活動経験を基に，より広い分野での研究を重ねる機会を求めていること。
- ② 青年たちが自らの企画で事業を展開したいという要望を持っていたこと。
- ③ 一方，40歳以上の地域のスタッフが後継者育成の観点から，若者の企画に厳しくアドバイスを与えながら見守っていこうという姿勢があること。
- ④ 両者の共同活動に町の住民が共感しはじめているということ。

という実情に支えられている。

II 自然学校「ふる里あったかとお」設立

Iで触れた自然学校「ふる里あったかとお」を運営するメンバー，プログラムづくり，事業などについてここで紹介する。

1 「あったかとお」を運営する青年たち

- ・ボランティア（長期休暇や休日を利用してプログラムスタッフとして参加するもの。高遠町民だけでなく，県内外からの大学生・高校生が多い。）
- ・スタッフ（平日は主に事務的な業務を行い，イベント時にはプログラムスタッフとして活動する高遠町の青年たち。有償と無償のスタッフがいる。）
- ・アドバイザー（青年たちを厳しい目で見守る高遠町を中心とした年配の方々，国立少年自然の家のボランティアたち）

2 はじめの取り組み ―企画づくり―

自然学校「ふる里あったかとお」が国立信州高遠少年自然の家を活動の場としてプログラムを行う際、自然学校スタッフである高遠の青年たちは、他の地域の大学生ボランティアと出会い、語り合う機会が多い。また、長期のキャンプなどの企画でスタッフとして参加する大学生とも深く親交している。設置1年目が過ぎようとする現在、普段から、高遠在住の者と遠方の大学生は、メーリングリストを構築し、ネット上では子どもの育成、環境問題、時事問題、卒業論文などについてのやりとりが盛んになってきている。また、スタッフとボランティアを交えた会議も頻繁に行われ、長期休暇中には東京から出席する者も多数いる。

企画は、そのやりとりの中で若者たちが自分たちの思いを語り合い、プログラムの叩き台をつくることから始められる。叩き台が完成した後の会議では、地域や経験豊富なアドバイザーから、経済面、装備面、安全面の厳しいチェックから始まり、プログラムの地元講師の候補にいたるまで、さまざまな意見や助言が寄せられる。この折衝をスタッフが中心となり進めていき、プログラムが完成されていく。

こうした過程を踏むことにより、青年は思いを語る場を持ち、異年齢（中年層・高齢者）や他地域（関東・東海地域）の人々との交流の場を持つことが出来る。話し合い（会議）自体が学びの場だと考える青年も多い。

事業実施の際、ボランティアやアドバイザーらは自分自身が加わった企画という面から、実際に参加することが多く講師となる人材も見つけやすい。また、遠くに住んでいても駆けつけるボランティアも多数いる。

3 これまで取り組んだ事例

2のような経過で企画した事業の例として次のようなものがある。

(1) 「子ども自然楽校」

地域の子どもたちを対象としたプログラム。登録制で高遠町周辺の小学生20人が参加している。親子・兄弟で参加する子どもも多い。毎月第4土曜日を中心に行われ、2000年度は9回実施した。

・ねらい

身近な体験、冒険、自主的・自発的な活動を通し、子どもたちが自信を持つことにより、思いやりの心をはぐくもうという趣旨である。

「好奇心を抑制しない」というこの事業に関わる青年たちの趣旨が、子どもと接する態度にも反映されている。

また、子どもたちが居住する地域でプログラムを行うことから、日常生活の遊びにおいても室内でのゲームばかりでなく、山や川で遊び、地域に住む大人とコミュニケーションを取ることの出来る環境づくりを目指している。

◎ プログラム内容

「地域の神社や自然を散策しよう」(5月) 「少年自然の家で遊ぼう」(6月) 「伝統のそば打ちに挑戦しよう」(7月) 「地域のお祭りに参加しよう」(7月) 「川遊びをしよう」(8月) 「キャンプをしよう」(9月) 「ヤキイモづくりをしよう」(10月) 「秘密基地づくりをしよう」(11月) 「お餅つきをしよう」(12月)

・成果

当初、数名の参加であったが、参加者及び保護者が新たな参加者を誘うといった動きがあった。指導者はアドバイザーが中心となっている。自宅周辺の自然の中や、身近な場所で活動するということが非日常的になっている子どもたちは、地域の大人から地域の風習を中心に「宝物」を継承できたという喜びを知ったようである。

(2) 「くったかとお」

地域の「食」をテーマに開催される季節ごとのプログラム。地域の人たちの意見を聞き、こ

の地方に伝わる食文化を研究し，技術を学び実施している。地元，東京や愛知などの都会を含め，広く親子を対象としている。原材料を収穫するところからプログラムは始まり，地域の大人に調理法を学んでいく。

・ねらい

食を通して地域をみつめる。日常生活を振り返る。先人の智慧を学ぶ。

◎ プログラム内容

(夏)「パン作り」参加者 (1家族・4名)

スタッフ4名 アドバイザー6名

(秋)「りんごジャム作り」参加者 (3家族・8名・学生3名)

スタッフ4名，ボランティア8名，アドバイザー4名

・成果

信州の名産でもあるりんごを農家の人と一緒に収穫し，地元の製パン業者の指導を受けながらの野外で作った手製パンは，「食」について興味を持たせる内容となった。ただ参加者が少なかったことが残念であり，当初計画していた「山菜料理づくり」が雨天により中止となるなど，天候に左右されるプログラムの在り方が課題として残った。

(3)「新宿区交流キャンプ」

2000年7月下旬に高遠町の交流都市である東京都新宿区主催の交流キャンプが2泊3日を4回にわたり実施され，自然学校が企画・運営を行った。参加者は各回10家族(40名)，合計で40家族(計160名)である。高遠町役場からの全面支援を受けたため，新宿区からの信用を得ることができ，実施が可能となった。

・ねらい

高遠の自然・歴史・人と交流する中で，新宿区民，家族の交流を深める。

◎ プログラム内容

・歴史散策 ・自然散策 ・工作体験 ・ジャガイモ掘り ・星座観察 ・野外炊飯 ・そば

打ち ・伝統芸能への参加 など

・成果

都会の人たちに高遠町の伝統芸能や祭りの体験，自然を通じた住民との交流といったプログラムの提供を通して，子どもたちに異文化の理解，自然の素晴らしさを肌で感じてもらうことができた。実施後も文通やメールで，参加者との交流を深めている。

(4) 歩く会

ボランティアの中で，自分の興味のある分野を集中的に話したい，参加したいという声が出たことから「部会」と称されるものが発足した。現在「子ども部会」「環境部会」「情報部会」「歩く会」がある。なかでも「歩く会」は健康に関心を寄せる主婦の方々を中心に進められ，11月から開始された。対象はとくに決めておらず，プログラム参加費も無料なので気軽に参加できる。

・ねらい

高遠の歴史や自然に触れながら歩き，健康づくりを目指している。

・内容

地域の専門家(公民館長・美術館長など)に自然や旧跡の解説を聞きながら，のんびりと歩く。

・成果

歴史を学び，地域を見つめ直すという目的は評判が良く参加者も多い。散策の中で自然学校のプログラムの材料探しができたようである。これまで2回実施され，各回約10名くらいの老若男女が参加している。

Ⅲ 「子ども長期自然体験村」実施を通しての経験

(事業概要)

文部省委嘱事業として2000年8月2日から15日まで13泊14日が高遠町三義地区を拠点として実施された。参加者は東京や名古屋など都会の

子どもたちを中心に9人。スタッフは自然学校スタッフ9名。学生（高校・大学を含む）ボランティア20人。プログラム講師（アドバイザーを含む）15人。その他では食事ボランティアや民泊スタッフなど高遠町民が50人以上たずさわった。国立信州高遠少年自然の家、地域のコミュニティ施設、民家、寺などに宿泊し、高遠町三義地区の年配の方々が講師の中心を担い、活動を進めた。

1 事業運営の経過

(1) 1999年10月

他の長期自然体験村を既に実施したところのある場所に開催中の様子を聞くため、地元住民の有志が研修に出かけた。毎月2回の割合でプログラムづくりを地元住民有志10名とともに始め、高遠のフィールドや人材、プログラムの洗い出しが行われた。その結果、実施場所を三義地区に決定し、地区住民や国立少年自然の家ボランティアが講師となるプログラムを行うことになった。

（注；三義地区の説明—高遠町の中心部から車で20分ほど離れた山間の地区。町の中でもっとも自然が残るといわれる地区でもある。地区の子どもたちが通う小学校は年々入学者が少なくなり、複年学級になることも視野に入れられている。地区住民は元気で、そばや農業などを題材としたイベントで盛り上がりを見せている。各人の趣味や特技は自然を題材としたものが多い。）

（ねらい）

- ・高遠の自然・文化・人に出会い、自分を見つめ、人や自然への思いやりの心を育む。
- ・自分のことは自分で出来る生活力を高める。

(2) 2000年4月

実施地区の住民との会合を持つ席で、同じ町の中でも地区ごとに特色をもち、組織がしっかりしていることを学ぶ。それまで町の中心部に居住している住民が主体となり企画を進めてきたために、企画をはじめて耳にした三義地区に居住する住民とのあいだで理解度に差があり、

連携をとるのが難しい状態であった。

自然学校スタッフは、地域のキーパーソン（中心になる人物）となる人材を探し、その方から口コミで企画の内容や趣旨を広めてもらうとともに、スタッフ自らの足で実施地区の会合や民家、そしてゲートボール場などを回り理解・協力を求めた。その際、高遠町教育委員会からの紹介や推薦を得ることにより、「子ども長期自然体験村」に対する理解や認知が早まった。

(3) 2000年6月

実施地区の区長が会議に出席し、地区のサークルや特技を持つ方々も会議に出席するようになり、企画づくりが具体的に進んでいくようになった。当初、数名であった会議出席者もこの頃には30名を超え、「いかに地域で子どもたちを迎え入れるか」という議論がなされた。

(4) 2000年7月

最後の会議では、学生スタッフも同席し、プログラムや地域の風習について地元住民から学ぶなかで、親交を深めた。

2 会場となる国立少年自然の家との関係

企画会議を行う際、国立少年自然の家の職員が2名参加し、少年自然の家の施設、備品、人材などの案内を受け持った。少年自然の家職員が企画会議に参加することは、高遠町教育委員会職員の参加同様、地元住民にとって事業に対する不安感を減少させる働きがあることがわかった。

学生スタッフを対象とした研修会を少年自然の家で4度開催し、専門職員による安全管理に対する指導や、少年自然の家のボランティアによるプログラム指導が行われた。

また、開催期間中の前半4泊を少年自然の家で過ごし、地域や自然のなかへ入り込む前の導入として、プラネタリウムやOHP、研修室などを使用し、参加者の意識や興味を高めた。ま

た、開村式での挨拶を請け負ったほか、備品の持ち出しや配膳などについて、長期自然体験村のプログラム進行に配慮された部分も見受けられた。

3 町の人々の協力

プログラムを実行するにあたっては、町民の協力が不可欠であった。

・プログラム内容

「読み聞かせ（高遠町の民話）」「お手玉」「こけしづくり」「マス釣り・マスつかみ大会」「民泊」「ゲートボール」「流しそうめん」「そばうち」「七夕短冊作り」「押し花」「巻き寿司」「寺泊」「竹とんぼづくり」「自然散策」「色テープ籠づくり」「伝統舞踊」「竹楽器づくり」「つる細工」「盆踊り」

これらはすべて実施地区の住民や、国立少年自然の家ボランティアが達人講師となり、進められたプログラムである。

三義地区に入ってから、宿泊施設内を除き、自然学校スタッフやボランティアは講師のサポートに徹した。

プログラム実施にあたり、講師となった住民は子どもたちがやってくることを心待ちにして、アイデアを練り、何度も練習や下見をして準備を整えた。スタッフは完成されたプログラムを事前に体験し、打ち合わせを行った。

子どもたちは体験の中で、講師や協力者に質問や話したいことがあるときには、電話をかけ、直接講師の家まで出かけ、地区住民たちを驚かせた。開催期間中は地区住民も気軽にプログラムや宿泊場所に顔を出し、地域全体の連帯感を強く感じさせた。

町民の協力はプログラム指導だけにとどまらず、食事のメニューから食事準備の指導までを、町の婦人団体が中心に進めてきた。地元色をだし、かつ、栄養価の高いメニューにしようとして研究を重ねた。開催期間中は子どもたちに包

丁の持ち方や料理法などを指導した。食材の差し入れも多く、野菜や米には期間中困らなかった。

4 成果と課題

参加者数が9名と少なかったが、高遠町の自然の中で三義地区住民を中心とした町民が全力で対応してくれた。高齢者の人々の偉大さ・温かさを知ることによって、頑張る力の大切さ、自然の不思議さを知ることができたようである。実施後も参加者が家族を連れて高遠町を訪れることが多く、親や兄弟に様々な体験場所を案内している。課題としては、学生スタッフと情報の共有を徹底すること（子どもといかに接するかを悩んでいる者もいた）や、地域住民と作り上げた企画を数ヶ月早く完成させ、早期の準備や研修を繰り返し行い、地域住民との信頼関係を早急に築くことが必要である。今回の体験村では講師の気配りによって助けられることが多かった。

IV ふりかえり

以上Ⅱ、Ⅲのプログラムを通して明らかになったことは、スタッフやボランティアである青年にとって、大変良い学びの場であったということである。

青年は自分の思い描いたプログラムが現実のものとなる喜びや、アドバイザーをはじめとした地域の大人たちとの親交の中で風習、技術、智慧を知ることになった。長期自然体験村にマネジメント（主に食事準備）のボランティアとして参加した青年は次のように言った。「次、何をすれば良いかという質問を自分自身でしなくなった。次どうすれば良いかは自分自身で考え、周囲の人に提案し、実際に行動するものだったということがわかった。考える力がついたことと、聞く耳を持てるようになった。」彼と何人かのボランティアは、長期自然体験村が始まる

時点では子どもたちとの接し方、地区住民の方々とのコミュニケーション、下ごしらえなど満足にできていなかったが、後半になるにつれ、時間の使い方やお手伝いで顔を出してくれる地域の主婦の方々とのコミュニケーションの取り方が上手になっていった。

また、青年たちは子どもたちとのコミュニケーションを、将来なるであろう父親や母親への準備として試行錯誤している。

青年同士では夢や思いを共有する場として、プログラム期間中も熱い議論が繰り返された。話し合った議論は、特色あるプログラムに反映されるという結果を見ることにもなった。

企画づくりを通して明らかになったことは、地域で活動する場合、信頼関係を築く必要があるということである。「くったかとお」の春のプログラムが中止になった理由は、雨の影響もあったが、最大の原因は実施予定集落の住民から理解を得ることができなかった点にある。企画案を集落の代表者らと話し合ったところ、お互いの意志が通じず、信頼関係を構築することができなかった。しかし、たび重なる会議や、スタッフがプログラム実施地区の民家を一戸ずつ訪問するうちに信頼関係がめばえ、8月に行われた「子ども長期自然体験村」実施の際には全面的な協力があり、実施地区住民はボランティアスタッフとしても多数参加するようになった。一度、地域の懐に入ってしまうと、温かく迎えてくれるということを青年たちは経験し、学ぶことができた。

まだ生まれて間もない自然学校「ふる里あったかとお」には多くの課題がある。住民の手弁当による自然学校を持続できるかどうかは、住民の意識の持ち方にかかっている。青年、地元住民からのさまざまな企画が湧き出し、みんなでプログラムを進めようという意識が持続できるよう、さらなる広がりを期待したい。また、企画作成にあたり、経験の浅いスタッフが調整

役を任されているため準備不足や情報発信の遅れなどが生じることがある。今後、各団体の研修に参加するほか、安全管理、企画づくりに対するアドバイザーとの関係を強化することが必要である。

長期自然体験村を実施するにあたり、野外教育を専門とする大学の教官や、民間の野外教育指導者に協力や助言を得た。その時をきっかけにして、自然学校に関わる町民は自分たちが持つ自然、安全、人との接し方についての意識が変化した。専門家が「あったかとお」にアドバイスを送ることにより、同団体は活動を活発にすることができた。今後もより一層の関係を強化していくことや、他の野外教育団体との連携を図り、情報収集していく必要がある。

その他の課題としては運営費及び装備の準備が挙げられる。そのためには、積極的な広報活動を行い、事業参加者の増加を図ることは勿論、行政及び社会教育施設とも連携強化を図り、施設等が備えているハード面を活用していくことも考えられる。

V 今後の挑戦

1年余りの活動によって、高遠町民から徐々に理解が深まり、支援や協力を受けることができたのは大変嬉しいことであるし、身が引き締まる思いでもある。

2001年度から「総合的な学習の時間」に関して、長野県環境部・自然保護研究所と地元の小学校をつなぐコーディネーターとしての役割を自然学校「ふる里あったかとお」に委託されることになった。また、「総合的な学習の時間」に対するプラン作り、講師としての役割も期待されている。これを契機に学校への支援活動も積極的に組み入れ、PTAを始めとする各種団体との積極的な連携も図っていくことも必要である。地域住民主導による活動が多方面に広がり、より多くの賛同者を得ていくことが持続さ

れる最低の条件である。

おわりに

今後、高遠町に限らず、各地にこのような自然学校が設立され発展するとすれば、すでに設置されている青少年教育施設が貢献できる場は拡大されるのではないか。青少年教育施設が、都会の青年や子どもたちと自然学校（地域住民中心の組織）を結ぶ交流の場として開放されれば、地元住民によるプログラム運営によって、今まで以上に地域に密着したプログラムや地元住民との出会いを期待することができる。野外教育・環境教育のプログラム指導、フィールド、器具等や宿泊施設を備える青少年教育施設に対し、住民は協力を期待している。一方施設は、単に利用の受け入れにとどまることなく、立地している地域からの支援を得ることが望ましいし、支援体制を図ることを望みたい。これにより、相互の連携も強化され、職員数の少ない青少年教育施設にとっても、地域密着型のプログラムを展開する自然学校は大きな財産となるのではないだろうか。

たとえば、「環境」をテーマにする場合、立地している地域の特色や実情に基づく環境学習を通して地元は環境にやさしいまちづくりに臨むことが可能となる。そして環境に配慮した地域づくりがあつてこそ、施設側が実施する環境教育は有効に機能するといえるであろう。

最後に、民間主体で行政が支援していくという形をとる自然学校への期待は大きい。自然学校「ふる里あつたかとお」が一つのモデルとなることを願いながら、団体の性格、能力にあつたプログラムの実施に関する今後の動向に注目していきたい。